

落ち葉堆肥農法を後世へ

世界農業遺産の伝統農法を守る

埼玉・武蔵野地域 三富落ち葉野菜研究グループ



落ち葉野菜研究グループ。左から早川光男さん、早川徹さん、井田さん（代表）、島田さん

【埼玉】武蔵野地域（三芳町、川越市、所沢市、ふじみ野市）には、360年前から継承されてきた伝統農法で、FAO（国連食糧農業機関）が2023年、世界農業遺産に認定した「武蔵野の落ち葉堆肥農法」がある。かつて、川越藩は革新的な新田開発を行った。農家1軒の敷地を短冊状（間口約72センチ奥行約675センチ）に区切り、その中に屋敷地・畑地・平地林を配置。平地林にはクヌギなど落葉広葉樹を植え、その落ち葉を堆肥にして畑を耕す。このシステムは江戸時代から続く

SDGsだ。地元農家が1998年に「三富落ち葉野菜研究グループ」を結成、人手が必要な落ち葉集めを地域住民と一緒に活動をはじめた。代表の井田和宏さんは、取り組みを20年以上続けられた秘訣について、「みんなで染しめたことかな」と話す。子どもどきに参加した人が今は大人になり、「最近僕たちが指導しなくても作業が終わっちゃう」とメンバーの島田喜昭さんはうれしそうだ。だが、課題もある。平地林は農地ではないため相続時の納税猶予の対象とならず、やむを得ず手放してしまう人もいる。それでも先人たちの遺産を「何とか次の世代に」

という思いの農家たち。住民・行政が一体となり、豊かな伝統を大切に守っていく。